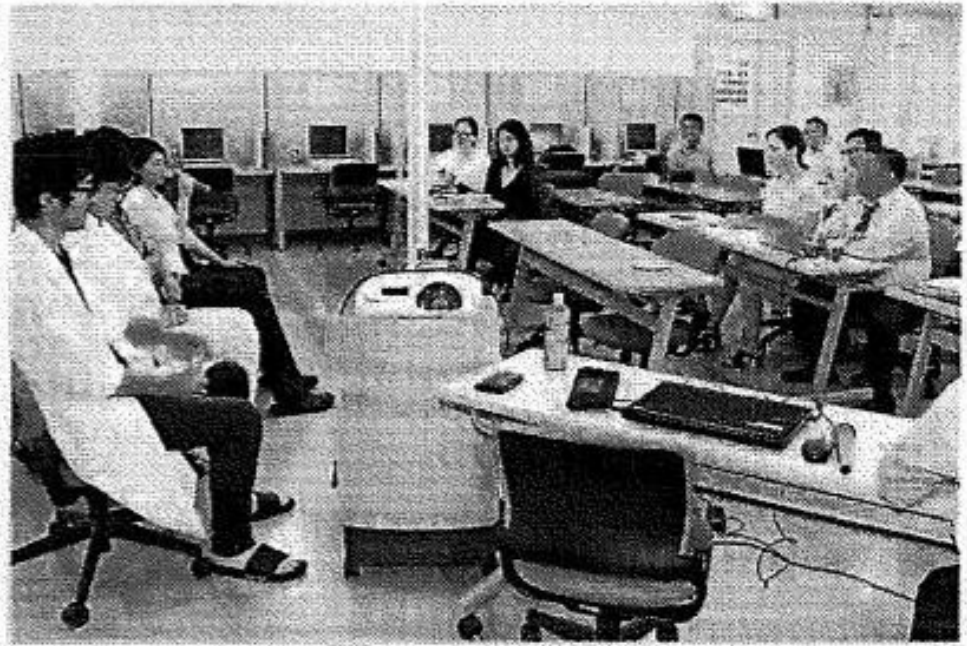


日本の臨床研修制度学ぶ

大宮市立病院 付属病院 モンゴルの医師ら



研修医（左）の生の声を聞くモンゴルの医師ら（橿原市で）

モンゴルの国立病院の医師や病院職員ら15人が、県立医大付属病院（橿原市）の臨床研修センターを訪れ、医師の臨床研修制度について視察した。

制度は、大学医学部を卒業して医師免許を取得して2年以上の臨床研修が必要と定めている。日本では2004年に始まった。モンゴルでも、都市と地方の医療格差を解消するため、今秋から日本をモデルにした制

度の導入を予定している。

一行は、モンゴルと国際協力機構（JICA）、国立国際医療研究センター（東京）が進めるプロジェクトの一環で5月27日に来日。31日は、研修制度のモデルケースに選ばれた付属病院の研修医4人にインタビューし、研修のあり方について意見を聞いた。

一行からは「当初のイメージと実際の研修現場では、ずれがないか」「良い指導医はいるか」などと質

問が出た。研修医は「科ごとにカルテの書き方が違うので、慣れるのに時間がかかる」「患者が急変したらすぐに駆け付ける医師がいる。自分を犠牲にして患者を救う姿勢を学んだ」などと、体験を交えながら話した。

モンゴルの医師バトゲレル・オイドブさん(50)は「奈良の大学病院は非常に高い能力があり、優れた医師を養成している。行政と連携した医師の確保策に学ぶところが多々ある」と話していた。一行は県内の他の病院なども視察し、6月9日に帰国する予定。